

「20(E) まいど! 倫を号です、いい天気が続いてます、ソフまででしようか。」
「本と全く縁のうすい私、そのうすい縁のうすい時があまじろう 精ん読」
得意です、 幸せ運ぶアホ一鳥

今週の

倫理

11月のテーマ | 本からの学び

2021. 11. 20~11. 26

1256号

J・o・b総研（運営元・株式会社ライボ）が二十〜六十九歳の社会人四五一名を対象にした「二〇二一年秋の読書実態調査」によると、コロナ禍前より読書時間が増えたという回答が四一・二%という結果が出ています。読書の目的が「自身の成長のため」という回答が五八・一%と一番多く、日本人の読書離れが進んでいると指摘される中でも、本は私たちにとって身近で人生をより豊かにしてくれるものといえるでしょう。

電子書籍で読書する割合も増えており、オンライン上で気軽に本に親しむことが出来るようにもなりました。しかし多くの本の中から、何を読めばよいのかわからないと悩むこともあるでしょう。

おすすめしたいのは同じ本を反復して読む「精読」です。特に感銘を受けた本でも、通読後、再び本棚から取り出して読む機会はそう多くはないのでしょうか。

英語学者で歴史家・評論家でもあった上智大学名誉教授の故・渡部昇一は精読の意義について次のように述べています。

「……筋を知っているのにさらに繰り返し読んで読むというところから、注意が内容の細かい所、おもしろい叙述の仕方などにだんだん及んでゆく」「文体の質とか、文章に現われたものの背後にある理念のようなものを感じ取れるようになるには、（中略）反覆によるセンスの練磨しかないらしいのである」（『知的生活の方法』）



一冊の本を深く理解するとは

中国の歴史書『三国志』（魏志）に「読書百遍義自（おの）ずから見（あらわ）る」という言葉があります。意味の通じないところも百回繰り返し返して読めば自然に明らかになる、という意味です。特にその国を代表するような古典と呼ばれる作品は、多くの人に繰り返し読み続けられて現代に残った本です。一度通読しただけでは文章の背後にある真意を読み取ることは難しく、繰り返し読むことで、古典ならではの味わいが出てくることでしょう。

さらに、倫理研究所二代目理事長を務めた故・丸山竹秋は、一冊の本を深く理解することについて次のように述べています。

「多くの本を読みあさるのもよいが、今はそれよりも一冊の本をふかく理解することだ。理解するということは、ほんとうは実践することなのだ。実践とは、それを身をもって味わい、身をもって行なうことである」（『よろこんで生きる』）

例えば偉人の伝記を読み、深く感動したという場合、その一端を少しでも生活に取り入れようと実践し、人生がより充実したものとなったならば、それはその一冊を深く理解したということになるでしょう。

一冊の本を精読し、そこから得たものを自身の生活に取り入れて実践し、より良くなるべく、そのような、本を深く理解する読み方をしていきたいものです。

十一月度の一句「百万神 どうぞし鳥根縁むす心」